

◇研究ノート◇

## 都市的心性としての競争志向性と対人認知様式

—— 都市部大学生を対象とした検討<sup>1)</sup> ——

矢田尚也・池上知子

### ◆要旨

本研究では、都市的心性である競争志向性が対人感情や対人認知に及ぼす影響について、社会的比較感情（尊敬・嫉妬・軽蔑・同情）と対人認知における相補性（ある次元の評価が高ければ、別の次元の評価は低くなる傾向）／非相補性（ある次元の評価が高ければ、別の次元の評価も高くなる傾向）に注目して検討した。大学生を対象に、まず競争志向性を測定した上で、自分よりも有能あるいは有能でない架空の人物を提示し、その人物に対して抱いた感情と印象について回答を求めた。その結果、競争志向性は、有能な人物に対する感情反応に影響し、競争志向性が高い者は、競争志向性が低い者に比べて、有能な人物に対して嫉妬を感じやすいことが示された。また、競争志向性の高い者は、自分よりも有能な人物については相補的に評価する（有能性を高く評価するほど温かさを低く評価する）一方で、自分よりも有能でない人物に対しては非相補的に評価する（有能性を低く評価するほど温かさも低く評価する）傾向を示した。これらに加えて、競争志向性が有能な人物に対する相補的認知を促進する場合には、有能な人物に対する嫉妬感情に媒介されることが示された。これらの知見は、競争志向的になりやすいと考えられる都市部の生活者が、自他の比較に基づいて自尊心を維持するよう動機づけられやすいことを示唆するとともに、都市居住者の心理社会的適応に負の帰結をもたらす可能性のあることを示唆している。

キーワード：競争志向性、温かさ、有能性、相補的認知、社会的比較感情

(2012年9月7日論文受理, 2012年11月2日採録決定 『都市文化研究』編集委員会)

### はじめに

社会生態学的な観点からは、社会環境と個人特性の関係は相互形成的であると考えられる。つまり、人は、自分の置かれた社会環境に適応するように、心理的、行動的傾向を形成し、またその結果として、個人を取り巻く社会環境が形成される (Oishi & Graham, 2010)。社会環境とは、物理的、社会的、対人的環境を指し、例えば、経済体制 (e.g., 自由市場, 資本主義, 農業), 報酬構造 (e.g., 能力主義), 人口構造 (e.g., 人種の多様性, 人口密度), 地理的特性 (e.g., 山間部, 都市) といった巨視的構造や、街や近隣地域の特徴 (e.g., 平均年収), 住居 (e.g., 高層マンション), 家族構成 (e.g., 核家族) などの中間的構造が含まれる (Oishi & Graham, 2010)。都市は、人口密度が高い、生活テンポが速いなど、社会環境的側面において様々な特徴を備えており、そこに居住する人

たちの心理や行動傾向に少なからぬ影響を与えると考えられている (岩田, 1995)。本研究では、都市的環境において形成されやすい個人特性として競争志向性 (i.e., 競争的な対人関係に価値を置き、自他の優劣を重要視する傾向 (cf. Martin & Larsen, 1976)) に注目し、競争志向的であることがどのような心理社会的帰結をもたらすかを対人感情と対人認知に焦点を当て検討する。

### 都市的環境と競争志向性

都市的環境が個人特性としての競争志向性の形成を促すことを実証的に検討した研究はいくつか存在する。Madsen (1967) は、メキシコの都市部 (Puebla, 人口は約300,000人) に住む子どもと、村落部 (Texoloc, 人口は約2,400人) に住む子どもに、4人で協力することで多くの報酬が得られる課題に取り組みさせたところ、都

市部の子どもは村落部の子どもに比べ、より競争的に振る舞うことを見出した。また、Madsen and Shapira (1970, 実験3) は、同様の課題を用いて、アメリカの大都市であるロサンゼルスに住むメキシコ系アメリカ人の子どもと、メキシコの村落部 (Nuevo San Vicente, 人口は約800人) に住む子どもを比較しているが、後者より前者の方が競争的であることが示されている。同じ手続きを用いて、イスラエル (Haifa or Mount Carmel vs. Kibbutz, Shapira, 1976; Shapira & Madsen, 1969) や韓国 (Seoul vs. Sawhoo, Poongcheun, and Dosan, Madsen & Yi, 1975) で行われた研究においても、同様の結果が確認されている。さらに、Kaganら (Kagan & Madsen, 1971; Kagan & Madsen, 1972a, 1972b) は、Madsenら (1967, 1970) とは異なる課題を用いて、ロサンゼルス在住の子どもとメキシコのNuevo San Vicente在住の子どもを比較しているが、前者の方が競争的な行動傾向 (i.e., 自分の利得を最大化し、相手の利得を最小化する傾向) が強いことを明らかにしている。これらは子どもを対象とした実験で得られた結果であるが、これらの研究から少なくとも、村落部と比べて、都市部に居住している者の方が、発達の早期において競争的な態度の基盤が形成されやすいことがうかがえる。

都市部居住の子どもの方が村落部居住の子どもよりも競争志向性を発達させやすい一因として、母親の養育態度の影響が考えられる (Kagan & Ender, 1975; Madsen & Kagan, 1973; Shapira, Lomranz, & Todd, 1977)。例えばShapiraら (1977) は、イスラエルの都市部に居住する母子と村落部に居住する母子を対象に実験を行い、子どもの課題遂行に対する母親の報酬分配の方法について検討している。その結果、都市部の母親は村落部の母親よりも子どもに与える報酬量が少なく、失敗時には報酬を与えない母親の数も都市部の方が多かった。この研究では、報酬獲得のために子どもが行う課題の難易度を母親がどのように選択するかについても検討しているが、村落部の母親に比べて都市部の母親の方が、より多くの報酬が獲得できる困難な課題を子どもに行わせる傾向が強かった。これらのことから、都市部居住の母親は、子どもの課題遂行の成功時と失敗時に与える報酬量を明確に区別し、より多くの報酬が得られるように子どもの行動を方向づける傾向にあることが示唆される。自己利益の最大化が競争的行動と結びつくことを考慮すれば (Kagan & Madsen, 1971, 1972a, 1972b; Madsen & Kagan, 1973), 都市部の子どもは、母親から自己利益を最大化するよう促されることによって競争的態度を身につけると考えられる。

さらに、4-5歳の子どもよりも7-9歳の子どもにおいて (Kagan & Madsen, 1971), また、5-6歳の子どもよりも8-10歳の子どもにおいて (Kagan & Madsen,

1972b), 競争性の都鄙差が大きくなることも示されており、これらの結果は特に、都市部に住む子どもの競争性が年齢とともに強まることからもたらされていた。このことは、幼少期に形成された競争志向的な精神基盤が、都市的環境下で成長することによってさらに強化されていく可能性を示唆し、都市部居住者は競争志向的になりやすいという主張を裏付けるものである。事実、成人を対象とした調査において、達成動機が強く、社会的承認や競争を重視する傾向と定義される個人主義傾向 (idiocentrism; Triandis, Leung, Villareal, & Clack, 1985) は、村落に住む人よりも、都市部に住む人の方が強いことが示されている (Freeman, 1997)。以上より、都市的環境下では、競争志向的心性が形成されやすいといつてよいだろう。

### 競争志向性と対人感情・対人認知

それでは、競争志向性は対人感情や対人認知にどのような影響を及ぼすであろうか。本論文では、この問題について、社会的比較感情理論 (Smith, 2000) と社会的判断の相補性理論 (Judd, James-Hawkins, Yzerbyt, & Kashima, 2005) の観点から検討を行う。

Smith (2000) が提起した社会的比較感情理論に基づけば、自分と他者がある次元において比較した際に生起する感情は、比較次元における自他の優劣 (上方 vs. 下方) と感情の性質 (対比 vs. 同化) によって4つに分類される。すなわち、自分より優れた他者と比較 (上方比較) したときは、相手に対して尊敬もしくは嫉妬の感情が生起し、自分より劣った他者と比較 (下方比較) したときは、軽蔑もしくは同情的感情が喚起される。さらに、自他間の関係が競争的であるか、協力的であるかに応じて、相手に対して喚起される感情の性質 (対比的 vs. 同化的) が規定される。競争的關係とは、自分にとっての利益が相手の不利益となり、相手にとっての利益が自分の不利益になる関係である。協力的関係とは、自分にとっての利益が相手にとっても利益となり、自分にとっての不利益が相手の不利益にもなるような関係を指す。競争的關係では嫉妬や軽蔑といった対比的感情が、協力的関係では尊敬や同情といった同化的感情が喚起される。換言すると、競争的關係にあるときは、自分よりも有能な他者 (i.e., 上方比較) に対して嫉妬 (i.e., 上方対比的感情) が生起し、自分よりも有能でない他者 (i.e., 下方比較) には軽蔑 (i.e., 下方対比的感情) が生起しやすいのに対して、協力的関係では、自分よりも有能な他者には尊敬 (i.e., 上方同化的感情), 自分よりも有能でない他者には同情 (i.e., 下方同化的感情) が生起しやすくなる。

矢田・池上の一連の研究 (2009, 2010, 2011) では、自他比較の結果として生起するこれら社会的比較感情 (尊敬, 嫉妬, 軽蔑, 同情) が、対人認知の相補性の生

起に及ぼす影響を検討している。他者や他集団についての評価は、大別して有能性と温かさという2次元に基づくことが知られており（e.g., Rosenberg, Nelson, & Vivekananthan, 1968; Wojciszke, Bazinska, & Jaworski, 1998; Cuddy, Fiske, & Glick, 2008）、一定の状況下で、これら2次元に基づく評価の間に相補性（i.e., 一方の評価が高ければ、他方の評価は低くなる傾向）が認められることが近年明らかになっている（Judd et al., 2005; Kervyn, Yzerbyt, & Judd, 2010）。例えば、Juddら（2005）は、有能性と温かさのいずれかの次元において対照（高 vs. 低）をなす2つの社会的対象（集団、個人）を同時に観察し比較することで、他方の次元において相補的評価が行われることを示した。

矢田・池上（2010, 2011）は、上記の社会的比較感情が有能な人物と有能でない人物の温かさの評価に及ぼす影響について、Smith（2000）による各感情の定義に基づき、以下のように論じている。すなわち、尊敬（上方同化的感情）が喚起されると、優れた比較対象が役割モデル（role model）として理想化されるため、対象人物に対する全体的な評価が上がり、その結果、有能な人物の温かさに関する評価が高まる。それに対して、嫉妬（上方対比的感情）は、優れた比較対象に対する悪意（ill will）を含んでおり、その悪意を正当化するための理由（e.g., 対象人物の欠点）を探索するよう観察者を動機づけるために、有能な人物の温かさに関する評価を低める。他方、同情（下方同化的感情）が生起すると、一種の救済措置として、特定の重要な次元における劣った対象に対する評価を高めようとするのが推測されることから、有能でない人物の温かさに関する評価が高まる。軽蔑（下方対比的感情）は、劣った比較対象が無価値（worthless）であると判断された場合に喚起される感情であるため、重要な人格特性次元に関して対象人物の評価を低めようとするのが考えられる。よって、軽蔑は有能でない人物の温かさに関する評価を低める。

これらの仮説に基づいて感情反応が温かさに関する他者評価に及ぼす影響を検討した結果、自分よりも有能な他者に対しては、尊敬を感じるほど対象人物の温かさを高く評価し、嫉妬を感じるほど対象人物の温かさを低く評価する一方で、自分よりも有能でない他者に対しては、軽蔑を感じるほど相手の温かさを低く評価することが示された。つまり、有能な他者を評価する場合、尊敬は相補的認知を抑制するのに対し、嫉妬は相補的認知を促進し、有能でない他者を評価する場合には、軽蔑が相補的認知を抑制することが示唆される。これらの研究では、相補的認知の生起における同情の効果は明確には示されていないが、上述の議論から、同情の生起によって、一種の救済措置として、ある次元で劣った対象人物に対して、別の重要な次元（i.e., 温かさ）における評価を高

めると予測することにはある程度の妥当性はあると考えられる。つまり、同情は、劣った人物に対する相補的認知を促進する可能性はあるだろう。

さらに、矢田・池上は、自他の関係性（競争的 vs. 協力的）を実験的に操作して、その影響を検討している。Yada and Ikegami（2011）では、教示により参加者の側に対象人物と実際に競争する、または協力することになるという期待を形成したうえで、また、矢田・池上（2010）では、実験参加者に競争、または協力を含意する文章に触れさせることで各概念を暗黙裡に活性化したうえで、自分よりも有能な対象人物、または有能でない対象人物に対する感情反応を測定している。しかし、いずれの研究においても、関係性による効果は認められなかった。これらの実験操作が有効に機能しなかった理由の一つとして、個人特性としての自他の優劣に対する敏感さや競争的關係の形成しやすさが統制されていなかった点が挙げられる。

上述の都市的環境と競争志向性の議論から推察されるように、競争的關係を志向する程度（i.e., 競争志向性）の高い者は、常に他者を競争相手としてとらえ、自他の優劣に敏感になることが想定できる。つまり、遭遇した対象人物との間に競争的關係が形成されやすく、対比的感情が促進され、同化的感情が抑制される傾向が認められやすくなるのが考えられる。したがって、自分よりも有能な相手と遭遇したとき、競争志向性の高い者は、尊敬より嫉妬を感じやすく、相手の有能性を高く認知するほど、温かさの評価を下げる相補的認知の傾向が顕著になるが、競争志向性の低い者（協志向性が高い者）は、嫉妬より尊敬の感情を抱くため、相手の有能性を高く認知するほど、温かさも高く評価するという非相補的認知の傾向をむしろ示すことが予測できる。他方、自分よりも有能でない相手に対したときは、競争志向性の高い者は、同情より軽蔑を感じやすく、相手の有能性を低く評価するほど温かさの評価も低くなる非相補性が認められやすくなり、競争志向性の低い者は、軽蔑より同情が喚起されるため、相手の有能性を低く評価するほど、温かさの評価は高くなるという相補性が表れやすいことが予測できる。

そこで、本研究では、都市部の大学に通う大学生を対象に、個人特性としての競争志向性に注目し、競争志向性の高さが感情反応を介して、対人認知における相補性の生起に及ぼす影響を検討することとした。冒頭での議論に基づけば、都市部の大学生は、都市的心性としての競争志向性を一定程度備えている可能性が高いが、都市環境下での生育期間の長さや時期、また、競争的態度を身に着けるような働きかけを母親などからどの程度強く受けたかによって個人差があると考えられる。したがって、都市地域で生活する個々の大学生の競争志向性の程



度を測定し、対人認知や対人感情との関連をみることで仮説を検証することとした。

## 仮説

仮説1 競争志向性が強いほど、有能な人物に対しては嫉妬を、有能でない人物に対しては軽蔑を感じやすい。競争志向性が弱いほど、有能な人物に対して尊敬を、有能でない人物に対しては同情を感じやすい。

仮説2 競争志向性が強いほど、有能な人物に対しては相補的認知が生起し、有能でない人物に対しては非相補的認知が生起する。

## 方法

大学生を対象として、競争志向性を測定した上で、シナリオによって自分よりも有能な人物あるいは有能でない人物を提示し、各人物に対する感情と印象について一連の尺度上で評定を求める質問紙調査を行った。

### 参加者と実験計画

都市部に立地する公立大学（大阪市立大学）の学部学生213名（男性101名、女性112名、平均20.37歳（ $SD = 0.15$ ））が調査に参加した。参加者は、対象人物が非常に有能である高有能性条件（ $N = 109$ ）と対象人物がまったく有能でない低有能性条件（ $N = 104$ ）のいずれかに無作為に割り当てられた。回答に不備のあった12名のデータは分析から除いた。したがって、分析対象者は、201名（男性95名、女性106名）で、高有能性条件101名、低有能性条件100名であった。

### 手続き

授業時間の一部を利用して質問紙調査を実施した。調査への協力は参加者の自由意思に基づくものであることを説明し、プライバシーの保護を確約した上で、質問冊子を一齐に配布した。本研究では、競争志向性を、Smith (2000) の競争的関係に関する定義と、競争性の都鄙差に関する実証研究に基づき、「利益の追求、獲得において、競争的な対人関係に価値を置き、自他の優劣を重要視する傾向」と定義した。そして、競争志向性の程度を測定するために、Martin and Larsen (1976)、Wagner (1995)、堀野・森 (1991) を参考に13項目からなる尺度を構成した。13項目のうち7項目は、競争的関係を志向することを表す項目とし、残り6項目は、逆転項目として協力的関係を志向することを表す項目とした。したがって、この尺度の得点が高いほど、競争志向性が高く、得点が低いほど協力志向性が高いことを示す。それぞれの意見項目にどれくらい同意できるか、1（全

くそう思わない）—9（非常にそう思う）の9点尺度上で回答を求めた。項目の一覧はAppendix 1に示した。

続いて、印象評定課題を実施した。印象評定課題では、まず、ある架空の大学生に関する紹介文を読んでもらい、有能性に関する相対評価、感情的反応の報告、有能性と温かさに基づく印象評定を求めた。相対評価では、優秀さと有能さの2項目について、自分と相手を比べてどちらがどれくらい優れていると思うか、1（自分の方が非常に優れている）—7（相手の方が非常に優れている）の7件法で尋ねた。感情反応の報告では、16個の感情語が提示され、対象人物に対してそれぞれの感情をどれくらい感じるかについて、1（まったく感じない）—9（非常に感じる）の9件法で尋ねた。感情項目は4種類の社会的比較感情（尊敬、嫉妬、同情、軽蔑）に関わる感情語を4語ずつ（尊敬：尊敬する・敬意を表する・賞賛する・あこがれる、嫉妬：嫉妬・妬ましい・うらやましい・気に入らない、同情：同情する・気の毒だ・憐み・不憫だ、軽蔑：腹立たしい・軽蔑する・蔑む・情けない）含んでいた。これらの感情語はFiske, Cuddy, Glick, and Xu (2002) を参考に独自に構成した。印象評定項目は、有能性に関する10項目と温かさに関する10項目で構成され、各次元に、5つの肯定的な特性形容詞（有能性：手際のいい、知的な、分別のある、のみこみのいい、頭のいい、温かさ：温かい、親しみやすい、思いやりのある、感じのいい、親切的な）と5つの否定的な特性形容詞（有能性：無分別な、頭の悪い、手際が悪い、知的でない、のみこみの悪い、温かさ：いじわるな、感じの悪い、親しみにくい、自分勝手な、冷たい）が含まれていた。これらは、Yzerbyt, Kervyn, and Judd (2008) を参考に構成された。各特性形容詞が、対象人物にどれくらい当てはまると思うかについて、1（まったく当てはまらない）—9（非常に当てはまる）の9点尺度上で回答を求めた。ネガティブ項目の得点は、尺度を構成する際にすべて逆転させた。最後に、成果主義的信念の強さと社会的成功の要因（熱意、能力、努力）の認知を測定したが、今回の分析では使用しなかった。

これらへの回答終了後、ディブリーフィングを行い、謝辞を述べて実験を終了した。

### 刺激人物の構成

印象評定課題で使用された対象人物に関する紹介文は、矢田・池上 (2012) の予備調査に基づいて選定した行動文によって構成した。矢田・池上 (2012) の予備調査では、46名（男性18名、女性28名）の参加者に80の行動文を提示し、それぞれの行動の有能さと温かさについて、9点尺度上で回答を求めた。行動文ごとに、有能さと温かさそれぞれの平均値を算出し、その得点が尺度の中点（5点）から1点以上離れているか否かという基準

Table 1 条件ごとの各変数の平均値と標準偏差

対象人物	有能性高		有能性低	
	低 (47)	高 (50)	低 (51)	高 (48)
競争志向性 (N)				
競争志向性	4.38 (0.76)	5.48 (0.70)	4.61 (0.83)	5.49 (0.84)
相対的有能性	5.53 (1.34)	5.75 (0.98)	2.99 (0.86)	2.92 (1.25)
尊敬	5.54 (1.42)	5.05 (1.61)	1.65 (0.85)	1.59 (1.07)
嫉妬	3.44 (1.51)	3.95 (1.38)	2.22 (0.91)	2.14 (1.22)
軽蔑	2.41 (1.31)	2.97 (1.43)	4.10 (1.79)	3.97 (1.89)
同情	3.36 (1.67)	3.60 (1.50)	3.59 (1.77)	3.43 (1.94)
有能性	7.10 (0.83)	7.02 (1.08)	3.74 (1.00)	3.53 (0.87)
温かさ	4.38 (1.03)	4.18 (1.04)	4.71 (1.20)	4.39 (1.04)
相補性	-0.13 (1.14)	0.12 (1.12)	-0.01 (0.99)	-0.24 (0.90)

Note: 括弧内は標準偏差

で実験に使用する行動文を選定した。具体的には、有能さでは中点よりも1点以上高く温かさでは中点付近である高有能文、有能さでは中点よりも1点以上低く温かさでは中点付近である低有能文、温かさでは中点よりも1点以上高く有能さでは中点付近である高温かさ文、温かさでは中点よりも1点以上低く有能さでは中点付近である低温かさ文、最後に、両方の得点が中点付近である行動文を中立文とし、5種類の行動文によって対象人物に関する紹介文を構成した。

有能な人物に関する紹介文には、有能性の高さを示す4つの行動文、有能でない人物に関する紹介文には、有能性の低さを示す4つの行動文が含まれていた。また、両方の紹介文に、温かさを示す行動文、冷たさを示す行動文、中立文が2つずつ含まれており、これらの文章は条件間で同一であった。つまり、紹介文は、4つの有能性に関する行動文、4つの温かさに関する行動文、2つの中立文で構成された。行動文の一覧と予備調査におけるそれぞれの平均値をAppendix 2に、実験に使用した実際の行動記述文はAppendix 3にそれぞれ示した。

## 結 果

### 有能性の操作の有効性

対象人物の有能性に関する操作が有効であったかどうかを確認するため、有能さと優秀さの相対評価の平均値 ( $r = .82, p < .001$ ) を算出し、対象人物の条件ごとに、尺度の中点 (4点) と比較した。その結果、有能な人物を提示された高有能性条件 ( $M = 5.66$ ) では中点よりも有意に高く評価され ( $t(100) = 14.59, p < .001$ )、有能でない人物を提示された低有能性条件 ( $M = 2.97$ ) では中点よりも有意に低く評価されていた ( $t(99) = -9.77, p < .001$ )。つまり、有能な人物が提示された参加者は、対象人物を自分よりも有能であるとみなし、有能でない人物が提示された参加者は、対象人物を自分よりも有能でないと見なしており、対象人物の有能性に関する操作

は有効であったことが示された。

### 参加者の分類

競争志向性に関する13項目からなる尺度の信頼性を検討したところ、比較的高い内的整合性が示された ( $\alpha = .77$ )。そこで、13項目すべてを含めて尺度得点を算出し、その中央値 ( $Me = 4.54$ ) よりも得点の高かった参加者を競争志向性高群 ( $N = 98$ )、中央値よりも得点の低かった参加者を競争志向性低群 ( $N = 98$ ) とした。

### 感情反応

有能な人物に対しては、競争志向性の高い者は、競争志向性の低い者に比べて嫉妬を感じやすく、有能でない人物に対しては、競争志向性の高い者は、競争志向性の低い者に比べて軽蔑を感じやすいという仮説を検証した。各感情反応の指標として、尊敬 ( $\alpha = .94$ )、嫉妬 ( $\alpha = .71$ )、軽蔑 ( $\alpha = .82$ )、同情 ( $\alpha = .83$ ) のそれぞれに関連する4項目の平均値を算出し、各感情得点を標準化して分析に用いた。まず、有能な人物に対する感情反応について、2 (競争志向性: 高群 vs. 低群)  $\times$  2 (感情種類: 尊敬 vs. 嫉妬) の混合計画の2要因分散分析 ( $N = 97$ ) を実施した。前者が参加者間要因、後者が参加者内要因であった。その結果、2要因交互作用 ( $F(1, 95) = 6.98, p = .01$ ) が有意であったため、感情ごとに競争志向性の単純主効果を検定した (Figure 1)。尊敬については、競争志向性の高い群 ( $M = 0.71$ ) と低い群 ( $M = 0.93$ ) で同程度に喚起されていたのに対して ( $F(1, 190) = 1.65, p = .20$ )、嫉妬は、競争志向性の低い群 ( $M = 0.34$ ) よりも競争志向性の高い群 ( $M = 0.68$ ) でより強く喚起されていた ( $F(1, 190) = 4.06, p = .045$ )。また、競争志向性の低い群では、嫉妬よりも尊敬の方が感じられやすかったのに対して ( $F(1, 190) = 11.45, p < .001$ )、競争志向性の高い群ではこれらの感情の喚起度に差はなかった ( $F(1, 190) = 0.02, p = .89$ )。同様に、有能でない人物に対する感情反応について、2 (競争志向性: 高群 vs. 低群)  $\times$  2 (感情種類: 軽蔑 vs. 同情) の混合

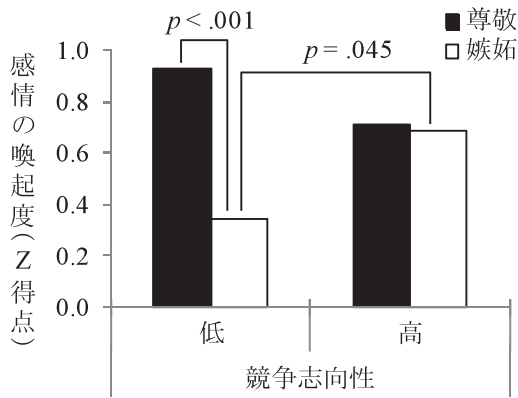


Figure 1 有能な人物に対する感情反応

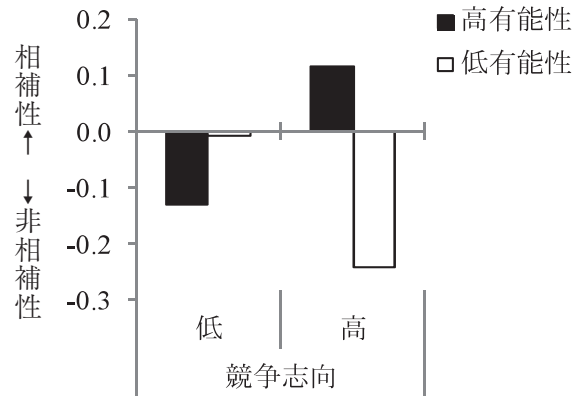


Figure 2 各対象人物に対する印象の相補性

計画の2要因分散分析 ( $N = 99$ ) を実施した結果、感情種類の主効果のみ有意で、同情 ( $M = 0.01$ ) よりも軽蔑 ( $M = 0.39$ ) の方が喚起されやすいことが示されたのみであった ( $F(1, 97) = 8.60, p = .004$ )。つまり、競争志向性と感情反応に関する仮説は、有能性の高い対象人物を評価する場合にのみ支持されたといえる。

### 相補的認知

競争志向性が強い場合、有能な他者に対しては相補的認知が生起し、有能でない他者に対しては非相補的認知が生起することを確認するため、相補的認知を示す指標を算出した。具体的には、まず、印象評定の有能性に関する10項目 ( $\alpha = .94$ ) の平均値と、温かさに関する10項目 ( $\alpha = .83$ ) の平均値を求め、それぞれの得点を標準化した上でそれらの積を算出した。この積の値は、一方の得点が相対的に高く、もう一方の得点が相対的に低かった場合、すなわち、相補的な評価をしていた場合に負の値をとる。解釈を容易にするため、この積の値に-1を乗算して、正の値が相補的認知を示し、負の値が非相補的認知を示すように変換し相補性得点とした。競争志向性が低い者より高い者のほうが、有能な人物に対しては相補的認知、有能でない人物に対しては非相補的認知が生起するという仮説に基づき、相補性得点について、競争志向性高群・低群における対象人物(高有能 vs. 低有能)の効果を計画された比較により検討した。その結果、競争志向性高群では、有意傾向ではあるが、高有能性条件 ( $M = 0.12$ ) と低有能性条件 ( $M = -0.24$ ) に差が認められた ( $t(96) = 1.75, p = .084$ )。他方、競争志向性低群は、高有能性条件 ( $M = -0.13$ ) と低有能性条件 ( $M = -0.01$ ) に有意な差は認められなかった ( $t(96) = -0.57, p = .57$ )。結果は、Figure 2に示されている。つまり、競争志向的な参加者は、有能な人物に対しては、有能性と温かさについて相補的に評価する一方で、有能でない人物に対する評価には非相補的に評価する可能性が示唆された。ただし、競争志向性の高い群にお

いて、対象人物の条件ごとに、相補性得点を中点(0点)と比較したところ、高有能性条件では、相補性得点は0と有意な差は認められず ( $t(49) = 0.74, p = .46$ )、低有能性条件では、有意傾向ではあるが0との差が認められた ( $t(47) = -1.86, p = .069$ )。すなわち、競争志向性の高い者が有能な人物を相補的に評価するとは言えないが、有能でない人物の評価には非相補的評価がなされやすい可能性のあることが伺えた。

### 感情の媒介効果

競争志向性が有能な人物と有能でない人物の評価に及ぼす影響における各感情の媒介効果を検討した。まず、有能な人物に対して、競争志向性が強いほど、嫉妬が喚起されやすくなり、尊敬が喚起されにくくなることによって、評価が相補的になるかを検証するため4つの回帰分析を実施した。1つ目は、競争志向性を独立変数、相補性得点を従属変数とする単回帰分析、2つ目は、競争志向性を独立変数、尊敬を従属変数、3つ目は、競争志向性を独立変数、嫉妬を従属変数とする単回帰分析を行い、4つ目として、競争志向性と2つの感情を独立変数、相補性の得点を従属変数とする重回帰分析を実施した。その結果、競争志向性が高い者ほど嫉妬を感じやすく ( $\beta = .18, SE = .29, t(93) = 1.74, p = .081$ )、嫉妬を感じるほど、相補的認知が生起しやすくなることが示された ( $\beta = .30, SE = .08, t(93) = 3.02, p = .002$ )。ただし、競争志向性が嫉妬の喚起に及ぼす影響は有意傾向に止まっていたことから検討の余地を残している点には留意すべきである。他方、競争志向性は尊敬の喚起には影響していなかった ( $\beta = -.16, SE = .31, t(93) = -1.60, p > .10$ )。ただし、尊敬は相補性の得点に負の影響を与えており ( $\beta = -.35, SE = .07, t(93) = -3.55, p < .001$ )、尊敬には、有能な人物に対する相補的認知を抑制する作用があることが示された。嫉妬と尊敬の媒介効果をブートストラップ法 (Preacher & Hayes, 2008) を用いて検討したところ、尊敬と嫉妬の媒介効果の95%



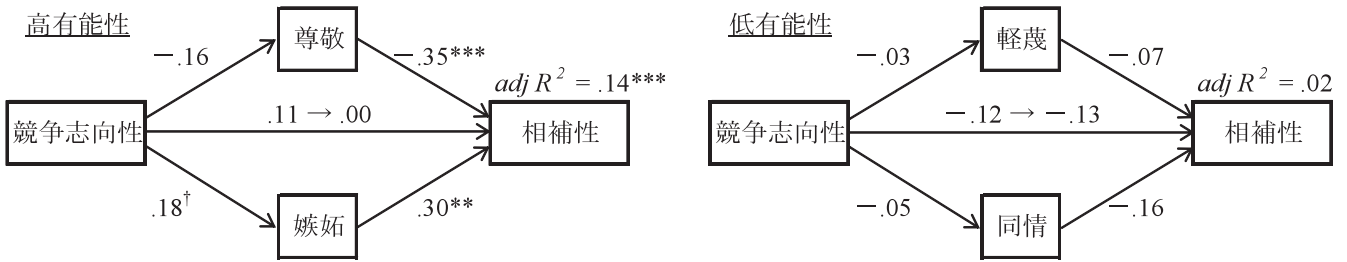


Figure 3 競争志向性が対象人物に対する相補性の生起に及ぼす影響における感情の媒介効果。

Note: †  $p < .10$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$ .

信頼区間がそれぞれ, 0.0000~0.4234, 0.0072~0.3101となり, 嫉妬の媒介効果の95%信頼区間に“0”が含まれていなかったことから, 嫉妬の媒介効果のみが有意 ( $p < .05$ ) であることが示された。つまり, 競争志向的な者が, 有能な人物を相補的に評価するのは, 嫉妬感情の作用によることが示唆された (Figure 3左)。

次に, 有能でない人物に対して, 競争志向性が強いほど, 軽蔑が喚起されやすくなり, 同情が喚起されにくくなることによって, 評価が非相補的になるかを検証するため上記と同様に4つの回帰分析を実施した。ただし, 尊敬と嫉妬は軽蔑と同情に置き換えられた。その結果, いずれの効果も有意とはならなかった (Figure 3右)。軽蔑と同情の媒介効果の有意性を検討するため, ブートストラップ法を用いた媒介分析を実施したが, 軽蔑と同情のいずれの媒介効果も有意とはならなかった (軽蔑:  $-0.0258 \sim 0.0908$ , 同情:  $-0.0368 \sim 0.1499$ )。したがって, 自分よりも有能でない人物を評価した場合には, 競争志向性が感情を媒介して相補的認知に影響するという予測は支持されなかった。

## 考 察

本研究では, 都市的心性として競争志向性に注目し, それが, 対人感情や対人認知に与える影響について検討した。さらに, 競争志向性が対人認知に及ぼす影響が社会的比較感情に媒介されている可能性についても検討を加えた。

まず, 競争志向性と感情反応の関係についてみると, 有能な人物に対する感情反応にのみ, 予測を一部支持する影響が認められた。つまり, 分散分析の結果から, 有能な人物に対して, 競争志向性の高い参加者が, 競争志向性の低い参加者に比べて嫉妬をより感じやすいことが示された。これは, Smith (2000) の社会的比較感情理論と整合する結果である。Smith (2000) によれば, 嫉妬は, 比較相手の優位と同時に, 自分の劣位を認識することで喚起される対比的感情であり, 競争的關係にあるときに喚起されやすいと考えられているからである。さ

らに, 嫉妬感情は, それを経験する者の自己評価を低下させ, 結果として, 抑うつなどの不適応な心理状態をもたらすことが明らかになっている (Smith & Kim, 2007; Smith, Parrott, Diner, Hoyle, & Kim, 1999)。都市とは多様な人びとが多数集まる場所であり, 必然的に上方比較 (自分より優位にある他者との比較) を経験する機会も増えるだろう。本研究の結果は, 都市的環境で高まりやすい競争志向性によって, 皮肉にも, 都市的環境における心理的な脆弱性がもたらされる可能性のあることを示唆している。しかし, 重回帰分析の結果では, 競争志向性が嫉妬の喚起度に及ぼす影響が有意傾向であったことから, この結果が再現されるかどうか, さらなる検討が望まれる。

他方, 有能でない対象人物に対する感情反応については, 仮説と異なり, 競争志向性が軽蔑を生起させやすくすることを示す結果は得られなかった。これには, 本研究の対象が日本人大学生であったことが関係しているかもしれない。鈴木・山岸 (2004) は, 日本特有の文化的価値観に言及し, “日本には謙遜の美德があり, 自己の成功や能力の高さを人前で公言する人は, 傲慢でうぬぼれが強い性格であると評価され, そのような評価は円滑な人間関係を形成する上で障害となる” (p. 18) と述べている。軽蔑は, 相手に対する自分の優位性に起因する感情であるため, 日本文化の中では競争志向性の高い者においても表出されにくいことが考えられる。このため, 本研究において競争志向性によって軽蔑感情が強まらなかったのかもしれない。ただし, 表出されないことが, 喚起されていないことを意味するわけではない。当該感情が喚起されていても表出が抑制されているだけかもしれない。したがって, 今後の研究では, 質問紙のような顕在的指標だけでなく, 個人の意識的統制の及びにくい潜在的指標 (語彙決定課題や修正ストループ課題など) を用いて検討する必要がある。

なお, 本研究では, 競争志向性は尊敬と同情の生起には影響していなかった。社会的比較感情理論 (Smith, 2000) では, 競争的關係と対極にある関係として協力的関係を位置づけ, 尊敬と同情はいずれも比較対象と協力関係にあるときに喚起される感情であるとされている。

したがって、本研究においても、競争志向性尺度を構成する際、半数の項目は協力的関係を志向する程度を反映する項目を逆転項目として含め、競争志向性得点が低くなるほど協力的志向性が高くなり両感情が喚起されやすくなると想定していた。それにもかかわらず、競争志向性得点の低さが、尊敬と同情の喚起を促進することに結びつかなかったのは、今回使用した項目の妥当性に問題があった可能性があり、尺度について再度検討する必要があると考えられる。

次に、競争志向性と対人認知の関係をみると、競争志向性の高い参加者群において、有意傾向ではあるが低有能性条件に比べ高有能性条件は相補性得点が高いという仮説に沿う結果が得られている。つまり、競争志向性の高い人は、低い人に比べ、自分より有能な他者に対して相補的に認知し、自分より有能でない他者については、非相補的に認知する傾向が表れやすいことが示されたといえる。ただし、有能な人物を評価した場合の相補性得点と有能でない人物を評価した場合の非相補性得点、それぞれ“0”と比較した結果、有能でない人物に対する相補性得点のみ、有意傾向で、“0”と差があった点を考慮すべきであろう。つまり、ここでの結果は、競争志向的な者が、有能な人物を相補的に評価している（有能性を高く認知するほど、温かさを低く評価している）というよりは、有能でない人物の評価を非相補的に評価している（有能性を低く認知するほど、温かさも低く評価している）傾向がより強く反映されているととらえたほうが正確であるといえる。

ところで、競争志向性の高い者が自分より有能でない他者に示すこうした認知傾向は、単に認知レベルの問題にとどまらず、行動レベルにも反映される可能性のあることに留意する必要がある。Cuddy, Fiske, and Glick (2007) のBIAS map理論では、有能性と温かさに関わる評価が、それぞれ相手に対する行動を規定すると考えられており、いずれの次元についても、評価が肯定的であるほど協調的行動を、否定的であるほど阻害的行動を促進すると予測する。また、有能性次元での評価は相手に対する消極的行動と関係し、温かさ次元の評価は、積極的な行動と関係すると仮定されている。このモデルは集団レベルの行動を説明するモデルであるが、対人レベルにも適用可能であることが確認されており (Yada & Ikegami, 2012), ある個人の有能性と温かさがともに低く認知されるということは、その人物に対して積極的に消極的にも阻害的な行動（攻撃、無視）が取られやすい可能性がある。このことは、競争志向性が高まりやすいと考えられる都市的環境では、自分より能力的に劣っている他者に対して阻害的な行動が生じやすくなることを示唆している。

競争志向性が対人認知に及ぼす影響における感情反応

の媒介効果については、有能な人物を評価する場合の嫉妬の媒介効果のみ有意であった。自分よりも有能な人物と出会った場合、競争志向性が高いと嫉妬感情が生じやすく、その結果、対象人物に対する相補的認知が促進されることが示されたといえる。既述したように、嫉妬は優れた比較対象に対する悪意を含んでおり、その悪意を正当化するための理由 (e.g., 対象人物の欠点) を探索するよう観察者を動機づけると考えられている。したがって、競争志向性の高い者は、自分より有能な人物に対して比較次元以外の重要な評価次元 (i.e., 温かさ) で相手の評価を低めることで、自分の劣位の認識に基づく自尊心への脅威に対処しているといえる。ただし、媒介効果は有意であったものの、競争志向性が嫉妬の喚起を促進する影響は有意傾向であったため結果の解釈には慎重さが求められる。今後、より多くの、多様なサンプルを対象として、同様の結果が再現されるか追試を行う必要がある。

以上、本研究では、競争志向性が対人感情や対人認知に及ぼす影響が限定的にしか認められず、感情の測定方法などに改善すべき点があったものの、都市的環境で形成されやすいと考えられる競争志向性もたらす心理社会的帰結についていくつか重要な知見を得ることができた。一つは、競争志向性が高まると、優れた他者に対して嫉妬感情が喚起されやすくなり、それが結果的に個人の心理的脆弱性を導く可能性があるという点である。もう一つは、競争志向性の高まりは、他者が能力的に自分より優れていても、劣っていても、その人物の人格次元における評価を引き下げることによって阻害行動を引き起こすおそれがある点である。競争志向性が、特に都市的環境において形成されやすい心理的形質であるならば、都市はそこに暮らす人たちの精神的荒廃をもたらしリスクを内包しているといえる。

本論文では、都市部居住者は村落部居住者よりも競争的であることを示す実証データに基づいて、都市的心性として競争志向性に注目した。しかし、なぜ、都市に居住することによって競争志向的になるのかについては本研究では言及できていない。この点については、近年提案された「関係流動性 (relational mobility)」(Yuki, Schug, Horikawa, Takemura, Sato, Yokota, & Kamaya, 2007) という社会生態学的要因に関する研究から示唆を得ることができる。関係流動性とは、「人が、当該の社会や状況において、必要に応じて、新たな関係相手を選択できる機会の多さ」(Yuki et al., 2007, p. 1) と定義される。この観点から、サービスや施設の多様性や、それによって増加する多様な職業機会のために、村落部と比べて多種多様な人びとが流入しやすい都市部は、関係流動性の高い環境であるといえる。事実、都市部（東京都、大阪府、愛知県、福岡県）居住者の方が、非都市部（秋



田県、鳥根県、徳島県、鹿児島県) 居住者よりも関係流動性が高いと感じていることが示されている (佐藤, 2012)。さらに、関係流動性が高い環境では、自分が関係相手として選ばれるためには競合他者との競争に勝たなくてはならないため、自身の価値に敏感になりやすく (会津・結城・大石, 2010)、他者とは異なる自己の独自性を高めようとする欲求が強まることも明らかになっている (竹村, 2010)。これらから、関係流動性の高い環境であるがゆえに、社会的価値について自他間で優劣を競う必要性が高まり、そのような環境で生活する者は競争志向的になりやすいと予想できる。この点についても、実証的検討が望まれるだろう。

最後に、研究対象者の限界について述べておく必要があるだろう。本論文では、都市部で形成されやすい個人特性として競争志向性に注目し、都市部大学生を対象として競争志向性の個人差が他者に対する感情反応や印象形成に及ぼす影響を検討した。その結果、競争志向性という個人特性の影響についていくつかの知見が得られ、都市的環境の負の側面に関する示唆も得られた。ただし、本研究では、研究対象者が都市部大学生に限られていたことから、本研究の結果が都市住民全体に一般化しうるかどうかについては、研究対象の規模や範囲を拡げて再調査を行うなどさらなる検討が必要である。加えて、都市的環境の性質やそれによる影響に論及するためには、都市部と村落部の居住者を対象とした比較研究を今後行う必要があるだろう。

## 注

1. 本研究の一部は日本社会心理学会第52回大会で発表された。

## 引用文献

- 会津祥平・結城雅樹・大石繁宏 (2010) . 他者からの排斥と受容による自尊心変動の日米差 日本社会心理学会第51回大会発表論文集, 572-573.
- Cuddy, A. J. C., Fiske, S. T., & Glick, P. (2007) . The BIAS map: Behaviors from intergroup affect and stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 92, 631-648.
- Cuddy, A. J. C., Fiske, S. T., & Glick, P. (2008) . Warmth and competence as universal dimensions of social perception: The stereotype content model and the bias map. *Advances in Experimental Social Psychology*, 40, 61-149.
- Freeman, M. A. (1997) . Demographic correlates of individualism and collectivism: A study of social value in Sri Lanka. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 28, 321-341.
- Fiske, S. T., Cuddy, J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002) . Model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 878-902.
- 堀野 緑・森 和代 (1991) . 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 教育心理学研究, 39, 308-315.
- 岩田 紀 (1995) . 都会人の心理 - 環境心理学的考察 [増補版] ナカニシヤ出版
- Judd, C. M., James-Hawkins, L., Yzerbyt, V., & Kashima, Y. (2005) . Fundamental dimensions of social judgment: Understanding the relations between judgments of competence and warmth. *Journal of Personality and Social Psychology*, 89, 899-913.
- Kagan, S., & Ender, P. B. (1975) . Maternal response to success and failure of Anglo-American, Mexican-American, and Mexican Children. *Child Development*, 46, 452-458.
- Kagan, S., & Madsen, M. C. (1971) . Cooperation and competition of Mexican, Mexican-American, and Anglo-American children of two ages under four instructional sets. *Developmental Psychology*, 5, 32-39.
- Kagan, S., & Madsen, M. C. (1972a) . Experimental analyses of cooperation and competition of Anglo-American and Mexican children. *Developmental Psychology*, 6, 49-59.
- Kagan, S., & Madsen, M. C. (1972b) . Rivalry in Anglo-American and Mexican children of two ages. *Journal of Personality and Social Psychology*, 24, 214-220.
- Kervyn, N., Yzerbyt, V., & Judd, C. M. (2010) . Compensation between warmth and competence: Antecedents and consequences of a negative relation between the two fundamental dimensions of social perception. *European Review of Social Psychology*, 21, 155-187.
- Madsen, M. C. (1967) . Cooperative and competitive motivation of children in three Mexican sub-cultures. *Psychological Reports*, 20, 1307-1320.
- Madsen, M. C., & Kagan, S. (1973) . Mother-directed achievement of children in two cultures. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 4, 221-228.
- Madsen, M. C., & Shapira, A. (1970) . Cooperative and competitive behavior of urban Afro-American, Anglo-American, Mexican-American, and Mexican village children. *Developmental Psychology*, 3, 16-20.
- Madsen, M. C., & Yi, S. (1975) . Cooperation and competition of urban and rural children in the Republic of South Korea. *International Journal of Psychology*, 10, 269-274.
- Martin, H. J., & Larsen, K. S. (1976) . Measurement of competitive-cooperative attitudes. *Psychological Reports*, 39, 303-306.
- Oishi, S. & Graham, J. (2010) . Social ecology: Lost and found in psychological science. *Perspectives on Psychological Science*, 5, 356-377.
- Preacher, K. J., & Hayes, A. F. (2008) . Asymptotic and resampling strategies for assessing and comparing indirect effects in multiple mediator models. *Behavior Research Methods*, 40, 879-891.
- Rosenberg, S., Nelson, C., & Vivekananthan, P. S. (1968) . A multidimensional approach to the structure of personality impressions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 283-294.
- 佐藤剛介 (2012) . 関係流動性が対人恐怖傾向に与える影響—国内地域間比較を用いた検討— 日本社会心理学会第53回大会発表論文集, 269.
- Shapira, A. (1976) . Developmental differences in competitive behavior of kibbutz and city children in Israel. *The Journal of Social Psychology*, 98, 19-26.
- Shapira, A., Lomranz, J., & Todd, J. (1977) . Reward distribution and goal selection of kibbutz and city mothers in Israel. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 3, 288-292.

- Shapira, A., & Madsen, M. C. (1969). Cooperative and competitive behavior of kibbutz and urban children in Israel. *Child Development*, *40*, 609-617.
- Smith, R. H. (2000). Assimilative and contrastive emotional reactions to upward and downward social comparisons. In J. Suls & L. Wheeler (Eds.), *Handbook of social comparison: Theory and research* (pp. 173-200). New York: Plenum.
- Smith, R. H., & Kim, S. H. (2007). Comprehending envy. *Psychological Bulletin*, *133*, 46-64.
- Smith, R. H., Parrott, W. G., Diner, E. F., Hoyle, R. H., & Kim, S. H. (1999). Dispositional envy. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *25*, 1007-1020.
- 鈴木直人・山岸俊男 (2004). 日本人の自己卑下と自己高揚に関する実験研究. *社会心理学研究*, *20*, 17-25.
- 竹村幸祐 (2010). 社会構造に依存する独自性欲求の適応価: 比較文化データによる検証. *日本社会心理学会第51回大会発表論文集*, 46-47.
- Triandis, H. C., Leung, K., Villareal, M. J., & Clack, F. I. (1985). Allocentric versus idiocentric tendencies: Convergent and discriminant validation. *Journal of Research in Personality*, *19*, 395-415.
- Wagner, J. A. (1995). Studies of individualism-collectivism: Effects on cooperation in groups. *Academy of Management Journal*, *38*, 152-172.
- Wojciszke, B., Bazinska, R., & Jaworski, M. (1998). On the dominance of moral categories in impression formation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *24*, 1251-1263.
- 矢田尚也・池上知子 (2009). 対人認知における相補性の生起過程に関する研究—感情の役割— *日本社会心理学会第50回大会発表論文集*, 626-627.
- 矢田尚也・池上知子 (2010). 関係性プライミングが相補的認知に及ぼす影響—感情の媒介過程に注目して— *日本社会心理学会第51回大会発表論文集*, 418-419.
- Yada, N., & Ikegami, T. (2011). Role of emotions in occurrence of compensation effect in person perception. Poster presented at the 12th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, San Antonio, Texas.
- Yada, N., & Ikegami, T. (2012). Impressions and emotions as determinants of interpersonal behaviors. Poster presented at the 13th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, San Diego, California.
- 矢田尚也・池上知子 (2012). 対人認知における相補性の生起過程—社会的比較感情の役割— *人文研究 (大阪市立大学文学部紀要)*, *63*, 9-26.
- Yuki, Schug, Horikawa, Takemura, Sato, Yokota, & Kamaya (2007). Development of a scale to measure perceptions of relational mobility in society. *CERSS Working Paper 75*, Center for Experimental Research in Social Sciences, Hokkaido University.
- Yzerbyt, V. Y., Kervyn, N., & Judd, C. M. (2008). Compensation versus halo: The unique relations between the fundamental dimensions of social judgment. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *34*, 1110-1123.

Appendix 1 競争志向性尺度

- 1 他人と競走して勝とうれしい。
- 2 人は他社とうまく力を合わせてやっていくことを学ぶべきだ。(R)
- 3 勉強や仕事で努力するのは、他の人に負けないためだ。
- 4 誰かが失敗すると、自分が得をした気分になる。
- 5 自分が成功するためなら誰かを困らせても仕方がない。
- 6 他者の成功を素直に喜べる。(R)
- 7 誰かに勝つことでこそ、自分の成長が実感できる。
- 8 人に勝つことよりもみんなと同じ目標に向かうことに意義がある。(R)
- 9 他者が自分よりも優れているとくやしい。
- 10 誰かと協力して行う仕事が好きだ。(R)
- 11 誰かを助けることが好きだ。(R)
- 12 他者に勝つことが人生で最も重要である。
- 13 誰かが成功するために自分が犠牲になってもかまわない。(R)

Note: (R) は逆転項目であることを示す

Appendix 2 実験刺激として用いられた行動文と記述統計量

行動文	有能性		温かさ	
	M	SD	M	SD
<b>高有能文</b>				
Xの成績は、1つだけ“B”で、あとはすべて“A”だった。	7.87	1.13	5.13	0.69
Xはある企業と共同で優秀はコンピュータプログラムを開発した。	8.28	0.96	5.17	0.85
Xは学部学生でありながら、論文を有名な学会誌に載せた。	8.07	1.50	5.13	0.58
Xは大学卒業後、外国の大学院に進学することが決まっている。	7.72	1.46	5.11	0.48
<b>低有能文</b>				
Xは授業中、机につぶして寝てばかりいる。	3.37	1.68	4.76	1.45
Xは授業で質問されたとき、まともに返答ができなかった。	3.50	1.59	4.93	0.90
Xは電気料金をよく払い忘れて電気を止められる。	2.41	1.13	4.67	1.35
Xは勉強すべき範囲を間違えたため試験に失敗した。	3.09	1.28	5.20	0.81
<b>高温かさ文</b>				
Xは友人と一緒に外出することが好きだ。	5.72	1.29	7.15	1.35
Xは友人とゆっくり会話することが好きだ。	5.74	1.45	7.28	1.29
<b>低温かさ文</b>				
Xは家にいてもめったに家族と会話しない。	4.17	1.37	2.43	1.49
友人がXに悩みを相談したとき、Xは気のない返事しかしなかった。	4.20	1.15	2.73	1.18
<b>中立文</b>				
Xはよく食堂に行ってカレーを食べる。	4.96	0.89	5.24	1.23
ほとんどの日、Xは職場へ向かう途中に缶コーヒーを買う。	5.09	0.55	5.18	0.58

Note: 得点は高いほどポジティブであることを示し、尺度の中点は5



Appendix 3 実験刺激として提示された行動記述文

---

**有能性の高い対象人物**

K・Hは大阪市立大学に通っている大学生です。K・Hは大学の近くに下宿しており、学校へ行く途中によく缶コーヒーを買います。ときおり実家にも帰るのですが、家族とはほとんど話をしないそうです。K・Hの大学でのこれまでの成績は、1つだけ“B”がありますが、あとはすべて“A”をとっています。また、ある企業と共同で優秀なコンピュータプログラムを開発したこともあります。昼食時にはよく大学の食堂を利用し、だいたいカレーを食べます。

K・Hは友人とゆっくり話をすることや、一緒に遊びに行くことが好きですが、この間、友人がK・Hに悩み事を相談したときには、気のない返事しかなかったそうです。

K・Hは学部学生ですが、研究論文を有名な学術雑誌に載せたことがあり、大学卒業後は外国の大学院に進学することが決まっています。

---

**有能性の低い対象人物**

K・Hは大阪市立大学に通っている大学生です。K・Hは大学の近くに下宿しており、学校へ行く途中によく缶コーヒーを買います。ときおり実家にも帰るのですが、家族とはほとんど話をしないそうです。下宿生活ももう長いのですが、K・Hはよく電気料金を払い忘れて電気を止められることがあります。授業に出席しても、K・Hはいつも机につぶして寝てばかりいます。昼食時にはよく大学の食堂を利用し、だいたいカレーを食べます。

K・Hは友人とゆっくり話をすることや、一緒に遊びに行くことが好きですが、この間、友人はK・Hに悩み事を相談したときには、気のない返事しかなかったそうです。

K・Hは先日の授業で先生に質問されたとき、まともに返答することができませんでした。さらに、K・Hは出題範囲を間違えたために試験に失敗したこともありました。

---

# Competitiveness as an Urban Mentality and Its Effects on Emotional Reactions to and Evaluations of Competent/ Incompetent Persons: A Case of Undergraduate Students in an Urban Area

Naoya YADA, Tomoko IKEGAMI

This study investigated how competitiveness, which is considered one example of an urban mentality, influences interpersonal affects and the perceptions of others. In this study, we focused on such social comparison-based emotions as respect, envy, pity, and contempt as well as compensation effects in social judgments on two fundamental dimensions: competence and warmth. We hypothesized that highly competitive people would feel envy rather than respect toward a person who is perceived as more competent than themselves and as a consequence they devalue the target person in the warmth dimension. We also hypothesized that highly competitive people would feel contempt rather than pity toward a person who is perceived as less competent than themselves and as a consequence they degrade the target's warmth. We conducted a questionnaire study with a sample of 213 Japanese undergraduates. Participants first completed a scale of 13 items to assess their degree of competitiveness. Then they gave their feelings and impressions toward one of two target persons: either a highly competent or a horribly incompetent person. As a result, those who were highly competitive were more likely to express envy toward the high-competence target than their less competitive counterparts. In addition, the highly competitive participants evaluated the highly competent person in a compensatory manner such that they perceived the target as high on competence but low on warmth. But highly competitive participants rated the low competence person in a non-compensatory manner such that they perceived the target as low in both competence and warmth. We also demonstrated that the effect of competitiveness on the occurrence of a compensation effect in the perception of the competent target was mediated by envy. Although our hypotheses were only partially supported, these results suggest that urban residents, who are prone to be competitive, are more likely to judge themselves based on self-other comparisons and are more subject to negative psycho-social consequences.

**Keywords:** competitiveness, warmth, competence, compensatory judgment, social comparison-based emotions